

『実学報』に見える近代中国語の日本漢字語借用

秦 春 芳

はじめに

日中語彙交流は長い歴史を持ち、複雑な様相を呈してきた。19世紀末までには、主に日本が千年以上にわたって中国から漢字・漢字語を取り入れ、漢字文化を摂取していた。しかし、アヘン戦争（1840～42）以降、清政府の国力は衰える一方で、その末、日清戦争（1894～95）で、明治維新で国の近代化を実現した日本に敗れた。それを境に、中国と日本の立場が逆転し、使用する言語面においても、中国が日本から近代文明を表す訳語を借用する時期に入った。本稿では、中国または日本において創造された漢字表記語（漢字語）の内、西洋文明と接触する際、新事物・新概念を表す意味・用法が日本語に出自を持っているものを日本漢字語と称する。

日本漢字語の中国語への移入について研究する際、どのような資料を調査対象とするかは重要な問題である。日本漢字語を中国語に取り入れた資料として、辞書、翻訳書、専門書や、中国と日本で発行されていた新聞、雑誌といった定期刊行物などがある。辞書、翻訳書、専門書は常に、調査対象として取り上げられてきた。それに対して、定期刊行物は、実藤（1981）、沈（1994、2008）、陳（2001）、朱（2003、2009）などで言及されているものの、それらを対象に日本漢字語について行われた調査はまだ少ない（沈ほか1998、李2005、朱2007など）。新聞、雑誌などは情報を伝え、言葉を伝播する役割を担っているという性質から、日本漢字語の中国語への移入について研究する際、この類の資料を用いた研究をする必要があると考えられる。新聞の中で、日本と密接な関係を持つ代表的なものに、『時務報』（1896～98）、『実学報』（1897～98）、『清議報』（1898～1901）がある。沈ほか（1998）では、「本格的に日本の新聞記事を訳出し、中国社会に提供したのは『時務報』（1896～98）の「東文報訳」が最初であった」と述べられている¹。これを参考に、筆者が調査したところでは、『実学報』の「東報輯訳」「東報訳補」がその次に位置するものとなる。

拙稿秦（2007）は、『実学報』とその原文である明治期の日本新聞の両方に出現する新漢字語30語は、明治期の日本新聞における使用例が『日本国語大辞典 第二版』（2000～02）『精選版 日本国語大辞典』（2006）における初出用例よりも早い、あるいは詳細であるという事実を指摘している。また、秦（2008）は、同一日本語記事の中国語訳『時務報』『論膠州灣』と『実学報』『清國膠州灣』について、中国語への翻訳の様相を具体的に分析し、

日本新漢字語の伝播媒体として近時注目度が増しつつある定期刊行物の一端を考察した。

本稿は、近代中国語における日本漢字語の借用の一端を解明することを目的とし、『実学報』における日本漢字語に焦点を当て、日中語彙交流という観点から考察を行う。『実学報』における日本漢字語の特徴を明らかにした上で、それらの語が中国語に取り入れられた要因を探り、また、中国語に取り入れられた後の行方について検討を加える。

1. 『実学報』と日本語翻訳記事欄「東報輯訳」「東報訳補」

1.1 『実学報』

『実学報』（旬刊）は、1897年8月から1898年1月まで上海で発行され、発行期間は短く、半年も続かなかったものの、19世紀末期に起こった維新運動の間に「最足以動守旧者之聽、且足以奪維新者之心」²の定期刊行物と評されている。総理は王仁俊であり、総撰述は章太炎が担当している。『実学報』は、「以講求学問、考覈名実為主義、博采通論、広訳各報」³を趣旨とした学術的な刊行物である。筆者の調査では、外国の新聞、書物を翻訳する欄は、最後の第14冊を除いて、影印版で約25ページあり、全体の約43%の分量を占めており、多いときには34ページにも及ぶ。その内の「東報輯訳」「東報訳補」は、王宗海（伯英）、孫福保（玉如）、程起鵬によって訳された日本新聞記事を紹介している。世界情勢や外国語記事を翻訳したものが掲載されている『実学報』は、中国の主要都市及び海外までに販路を広げ、上流社会の知識人と、ある程度教育を受けて漢文の知識を持つ者の間で広く読まれていたことが関係資料から窺える。

同時期に刊行されたほかの定期刊行物⁴と比べると、『実学報』を調査対象とすることには以下4点の利点がある。

- (1) 同時期のほかの定期刊行物と比べ、『実学報』は西洋以外に日本をも近代文明の「輸出国」として重要視し、日本、そして日本語を通じて新しい文明を取り入れようとする姿勢をより明確に示している。
- (2) 『実学報』の翻訳記事欄は日本の新聞記事をソースとして翻訳作業が行われたため、言葉遣いの面ではほかの定期刊行物より、直接、日本語特に漢字表記語の影響を受けている可能性が高い。
- (3) 翻訳記事の典拠が明確である。翻訳記事のソースとなる日本語記事の掲載新聞とその発行年月日が示されているため、原文と付き合わせることができる。よって、より精確な考察結果が得られると考えられる。
- (4) 沈ほか（1998）の「本格的に日本の新聞記事を訳出し、中国社会に提供したのは『時務報』の「東文報訳」が最初」という記述から、日本の新聞記事を土台にした中国の定期刊行物の中で、『実学報』は比較的早い時期のものと考えられる。

1.2 日本語翻訳記事欄「東報輯訳」「東報訳補」

『実学報』は前後に「東報輯訳」⁵と「東報訳補」⁶の二つの欄を設けて、日本から新し

い情報を中国に導入し、購読者に提供している。第9冊から更に「東報訳補」が加わったことは、「以鑿聞報諸君之望」⁷との記述からも分かるように、当時の購読者の要望と社会的要請を鮮明に反映している。『実学報』の翻訳記事は、10種類の日本語の新聞をソースとしている。その中で、『大阪朝日新聞』『時事新報』『東京日日新聞』の3種類の新聞の記事をソースとしたものは94本であって、翻訳記事全体の68%を占めている。以下、翻訳記事のソースである日本語記事の掲載新聞を表1にまとめた。なお、斜体になっているのは、これに似た名称の新聞の間違いの可能性があると思われるものである。

表1 翻訳記事のソースである日本語記事の掲載新聞

	原文記事が掲載された日本の新聞(五十音順)	記事数(本)
	大阪朝日新聞	36
	大阪時事新報	2
	大阪毎日新聞	8
	神戸又新日報	9
	時事新報	33
	中外商業新報	13
	東京経済雑誌	9
	東京日日新聞	25
	東京日日報	1
	日本銀行半季報	1
記事数の合計(本) ⁸		139

翻訳記事の内容に注目して見ると、記事は経済、外交、交通、政治、軍事、教育など多岐にわたっており、世界各国に関する情報が含まれている。ここから、近代的要素が多く含まれた日本の記事を通して近代文明を導入し、中国の近代化を目指そうとするという編集者の意図が見て取れる。各分野の記事の本数と記事全体の中で占める割合は、次の表2と図1で示しているとおりである。記事の分類は、その内容によって筆者が判定を行った。例えば、大統領の他国への訪問や両国間の契約の締結などは「外交」とし、鉄道の開通や電報事業の展開などは「交通・通信」に分類した。

表2 各分野の記事の本数と記事全体の中で占める割合

分野	経済	外交	交通・通信	政治	軍事	社会	文化	教育	災難	植物	天文	医学	気象
記事数(本)	38	19	18	14	12	11	8	7	6	2	2	1	1
割合(%)	27.3	13.7	12.9	10.1	8.6	7.9	5.8	5	4.3	1.4	1.4	0.7	0.7

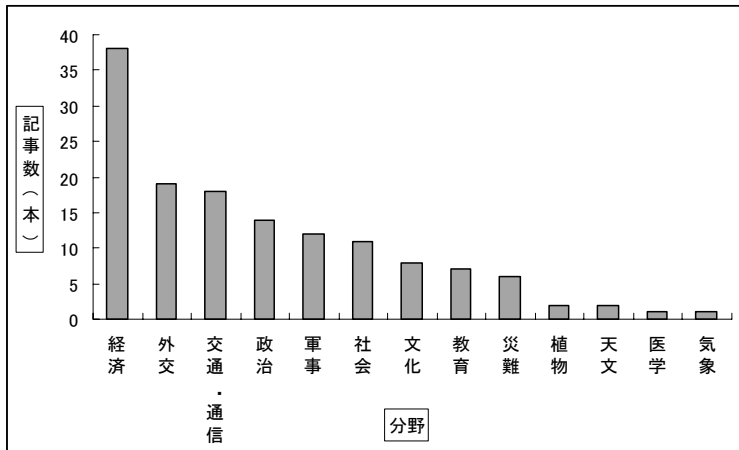


図1 各分野における記事の分布状況

2. 『実学報』における日本漢字語

2.1 調査対象語の抽出基準と方法

調査範囲とした翻訳記事から語を抽出する際、次の基準に従うことにする。

- (1) 基本的には2字漢字語を抽出する。なお、語の意味構成にも配慮し、意味上で分割不可能、あるいは一語とみなすほかない場合は、3字または4字の漢字語⁹も対象に入れる。
- (2) 基本的には上記の基準に従うが、調査対象範囲から除外するものもある。例えば、固有名詞（地名、人名、国名など）、接頭辞、接尾辞の付加した語（「彼国」「担当者」など）¹⁰、数詞、助数詞が含まれる語（「一月」など）である。

語を抽出する段階では、語形だけに注目する。調査対象語を絞る際には、二つの段階を設ける。第一に、古い用例と新しい用例の見落としに配慮し、その語が一般的に用いられていた、あるいは用いられているかも把握するために、当時と現代の日中両言語の辞書において、語の見出し語、あるいは関連情報としての掲載の有無を確認する。具体的には、日本語の場合、『言海』（私版、1979/明治22~23年刊の複製）、『新編大言海』（1982/『大言海』：1932~37）、『日本国語大辞典』（第2版、2000~02/初版：1972~76）を、中国語の場合、『辞海』（乙種、1936~37）、『辞源』（丁種普及本、1937）、『辞源』（正統編合訂本、1947/書誌データは15版[刷]による第1版の出版年：1939）、『漢語大詞典』（1986~94）、『大漢和辞典』（修訂版、1984~86）を用いる。日中の一方にしか出現しない語は、借用関係が成立しないとし、調査対象から外す。第二に、日本語記事と中国語の翻訳記事における意味について考察を行う。文脈における意味の違いが生じた語は保留し、誤訳の語は除外する。上記のような手順で、調査対象とする語の全体をまとめる。

ただ、上述の調査対象語の抽出方法には問題点がある。ある語が辞書に採録されるのはその語がある程度定着した後であり、辞書にはまだ採録されていないが、すでに言語社会の中に借用され、使用されている語もあるかもしれない。本稿では古い用例と新しい用例の見落としに配慮して、日中両言語の当時と現代の辞書における掲載情報を基準に調査対象語を抽出する手順を取っているが、上記の事情を考えると、抽出過程において見落としが生じている可能性もある。ここでは問題点として述べるにとどまるが、今後、各年代の辞書に焦点を当てて調査し、更なる改善を検討しなければならない。

2.2 『実学報』における日本漢字語

2.1で述べた抽出基準と調査対象語を選出する方法に従って、139本の翻訳記事について整理した結果、延べ語数で数えて9408語、異なり語数で数えて3472語を得、その内、2968語が調査対象語となった。更に、この2968語の出自について、上記の辞書及び各先行研究¹¹、中央研究院漢籍電子文献¹²、『新名詞訓纂』¹³での記述に基づいて考察した結果、日本漢字語及びその可能性が非常に高いと思われる語が813語¹⁴得られた。なお、紙幅の関係で、本稿では813語の全体を示さず、後の節で例として一部を示すことにする。

3. 『実学報』における日本漢字語の特徴

翻訳記事の内容が様々な分野に渡っているのと同様、抽出された日本漢字語も各分野から拾うことができた。上記の日本漢字語813語の特徴について検討した結果、以下の4つの観点を抽出できた。

(1) 専門語の観点からの分析

本稿において、専門語は、ある特定の職業に従事する者や、ある特定の学問分野、業界等の中で使用され、通用する言葉・用語群を指し、一般語は専門語としての特性を持たない言葉・用語群を指す。いずれも語の前後の文脈によって、その特定性・専門性の有無の判断を行った。例えば、「経済」「公使」「巡洋艦」「予科」のような語は専門語として、「青年」「居留」「盛装」「立食」のような語は一般語として扱った。『実学報』の日本漢字語を一般語と専門語の基準で分ける場合、それぞれ298語と515語あり、専門語のほうが圧倒的に多い。また、専門語を分野ごとに分ける場合、政治、経済、哲学、軍事、交通、教育などの分野の語が多い。これは、翻訳された記事は実用的な分野のものが多くを反映していると考えられる。以下、例を示しておく。

- ・行政・政治・法律・外交：議会 協商 共和国 大統領 逮捕 帝国など (152語)
- ・経済：原料 工業 商業 輸出 輸入 予算など (105語)
- ・哲学：意見 偶然 原因 現実 現象 条件 適用など (58語)
- ・軍事：艦隊 軍医 軍艦 軍事 工兵 巡洋艦 少佐など (48語)
- ・交通・通信：機関車 汽車 汽船 信号 線路 鉄道など (41語)
- ・教育：学校 課程 願書 教授 師範 生徒 予科など (25語)

- ・医学：医学 痙攣 血液 肺結核 病院長 病状 病毒など（18語）
- ・地理：緯度 気候 金星 大陸 地軸 半島 流域など（17語）
- ・その他：軍楽隊 人類学 速度 馬力 美術 標本 文明 平方など（51語）

(2) 意味分野の観点からの分析

『実学報』の日本漢字語の意味的傾向を見出すために、『分類語彙表』（増補改訂版、2004／初版：秀英出版 1964年刊）に基づいて、意味合いの分野ごとに「中項目」まで分類した。ただし、所属語数が多い項目の内、「1.30 心」の項目は、「中項目」の分類のみでは意味との対応が分かりにくいと、更に下位項目の「分類項目」まで分類した。また、いくつかの項目に見られる語の場合、その語の翻訳記事における意味の所属項目に分類した。ほかに、二つの品詞を持っている語でも、その語の所属する意味項目の分類に影響がないため、ここではその語を名詞として扱う場合の所属項目だけを示すことにする。また、「解剖」という語は、記事では「事物の条理を分析してこれを研究する」という抽象的な意味として用いられているが、『分類語彙表』では「1.3831 医療」という項目にしか見られない。このように両者の意味が一致しないため、「解剖」は『分類語彙表』による分類では除外した。更に、「育英会」「音楽隊」などの100語が『分類語彙表』に採録されていないため、筆者が掲載されている類例によって所属を判断した。

『分類語彙表』に基づいてその意味合いを見ると、『実学報』の日本漢字語は「抽象的關係」（207語）、「人間活動の主体」（183語）、「人間活動—精神および行為」（303語）、「生産物および用具」（73語）、「自然物および自然現象」（46語）の各部門に分布しており、その中でも、特に「人間活動—精神および行為」に属する語が圧倒的に多いことが分かった。「人間活動—精神および行為」に属する語の具体例を挙げると、「科学」「経済」「積極的」「談判」「反省」「美術」「方針」などがある。この分布傾向から、当時の中国で、この意味範疇の言葉が必要とされていた可能性が大きいと考えられる。更に、各項目を詳細に分析すると、「1.15 作用」「1.24 成員」「1.26 社会」「1.27 機関」「1.30 心」「1.31 言語」「1.37 経済」「1.38 事業」など、近代概念を表す語が中心的に借用されていることが明らかになった。

(3) 同一概念を表す新漢字語の併用の観点からの分析

同一事物を表す表現として、翻訳記事で二つの新漢字語が併用されている現象が見られる。例えば、「鉄道」と「鐵路」、「大統領」と「總統」、「会社」と「公司」、「汽船」と「輪船」、「契約」と「合同」などである。ただし、中国製新漢字語（上掲の例の後者）より、日本漢字語（上掲の例の前者）のほうが圧倒的に多く使用されている。この併用現象は、当時の中国語において、日本漢字語は定着しておらず、新概念を表す語彙は統一されていなかったことを反映していると言える。

(4) 日中同形語の観点からの分析

日中語彙交流の長い歴史の中で、日中同形語が多数生まれた。日中両国が同じく漢字文

化圏にあり、また中国語では「形」は漢字そのものであるため、本稿でいう日中同形語は、同じ漢字表記語を指す。なお、日中両国でそれぞれ文字改革が行われたため、字形に違いが生じているが、それは問題視しない。

日中同形語の誕生に関わった資料は多種多様であるが、『実学報』のような定期刊行物もその中の一つであることが、本稿の調査結果から指摘できる。現代中国語の観点から見ると、『実学報』から得た日中同形語はほぼ同形同義語であるが、「運転」「仮設」「汽車」「作業」「試験」「信号」「新聞」などのような同形異義語もある。これらの語の『実学報』での使用は、わずかながらも日中同形語が多く存在することに貢献したと考えられる。上記の同形異義語は、『実学報』の翻訳記事では原文記事と同じ意味として用いられているが、いつ、どのような過程を経て現代中国語としての意味に変わったのか、検討する必要がある。その点が今後の課題として残される。

4. 日本漢字語が中国語に取り入れられた要因

以上のことから、『実学報』を通して、各分野の日本漢字語が数多く中国語に導入されたことが明らかになった。では、なぜこのような言語現象が生じたのだろうか。

康有為の『広訳日本書派遊学摺』（1898）と張之洞の『勸学篇』（1898）でも指摘されているように、近代文明に関する日本語翻訳書は大量に漢字・漢字語を用いており、「日中同文」（ともに漢字を用いていること）の要素が多く含まれている。それを更に中国語に訳すことで、時間と労力を省いて、能率的に西洋文明の精髓を摂取することもできると考えられる。中国の知識人たちはこの点を認識し、日中の文字表記上で共通点があることを利用して、日本書籍や新聞の翻訳に大いに力を注いだのである。

また、上述の原因のほかに、下記のような社会的背景や文化発展の趨勢、及び言語構造自体の特徴なども日本漢字語の流入に大きな影響を及ぼしていた。

- (1) 日清戦争後、中国の半植民地化が更に進み、国は民族破滅の危機に直面するようになった。このような社会的情勢の下で、康有為、梁啓超を始めとする知識人は政治改革の緊急性を認識し、短期間で明治維新を成し遂げた日本に対する注目度がより一層高くなった。日本を通して西洋の近代文明を摂取する中で、近代文明を表す日本漢字語が日を増すごとに多く導入されるようになり、やがて一種の風潮となった。この「風潮」は20世紀初頭に絶頂期を迎え、世間に広く影響を及ぼしていた。
- (2) 中国人自身による訳語が分かりにくいため、一般的に受け入れられなかった。それは結果的に日本漢字語の流入に機会を与えたとも言える。清末から中華民国初めにかけて活躍した啓蒙思想家・翻訳家の嚴復も西洋新概念語の創出に力を注いでいた。しかし、氏の翻訳は桐城派¹⁵という古雅な文体に則ってなされたために、非常に難解であることもあり、氏による訳語は広く使用されることはなかった。例えば、日本漢字語「資本」の中国語版として、嚴復は「母財」という語を創り出したが、結局、一般的

に用いられず、「資本」に置き換えられた。同じく新概念語を多く創出した梁啓超も「智学」「群学」「資生学」(「平準学」)を世に出したが、それらの語が受け入れられず、その代わりに、日本漢字語の「哲学」「社会学」「経済学」が借用され、後に中国語に定着した。根本的に考えると、中国人による訳語の「難解」という欠点があることは否定できない。しかし、日本漢字語も新概念語であるため、多少なりに理解しにくい点があると推測される。したがって、上記の言語現象が見られた背後にあるものとして、当時の中国社会において、日本語の訳語を借用することが社会的風潮であったことが強く影響していたことが考えられると思われる¹⁶。

- (3) 中国語に導入された日本漢字語には一定の特徴が見られる。沈(2008)などでも述べられているように、語構成と造語法において中国語に相通じるところがある。江戸時代以前に造語された漢字語(例えば、「世話」「無茶」)は、中国人にとってその理解が非常に困難であるのに対して、近代文明を表す日本漢字語は中国人が見ても文字から意味が推測・理解できる。それは、それらの語の多くは漢字を一字ずつ並べることで創られており、語の構成要素は古くからの中国語の形態素であるからである(例えば、「哲学」「美術」)。したがって、日本漢字語は中国人が創った新語と違和感なく受け入れられてしまう。

上記のような歴史的背景、言語的相通などの諸要素の影響の下で、数多くの日本漢字語が中国語に取り入れられた。1920年代以降、それまでに日本語から借用してきた漢字語は次第に中国語の語彙体系に溶け込み、それらの語が外来語・借用語であることが意識されなくなった。

5. 『実学報』に見られた日本漢字語の行方

『実学報』に出現している日本漢字語は、後の中国語に定着したのだろうか、消滅したのだろうか。語の使用状況の推移、定着・消滅の実態を探るために、当時¹⁷の辞書のような性質を持つものと辞書、『漢語大詞典』、そして、魯迅の作品を用いた。

(1) 『新名詞訓纂』

辞書のような性質を持つものとして、『新名詞訓纂』(全4巻、民国周起予、民国7年上海掃葉山房刊石印本、中2本)を取り上げた。同資料は『明清俗語辞書集成』第3輯(2005年第3刷発行、長澤規矩也編、汲古書院)に収録されており、長澤によって、次のような解釈が付記されている:「政・学・語・物の四属に分け、日本から輸入したりした新語の古書に見える出典を記したもの」。また、唐詠裳の「新名詞訓纂序」によると、『新名詞訓纂』は、西洋と日本の書籍を翻訳したものに注釈を付ける最盛期から十年ほど経った頃に刊行されたもので、年少の識者周商夫によって、「新名詞」の出典が明晰且つ正確に記されていると記述されている¹⁸。

『新名詞訓纂』の刊行時期からすると、同資料に採録されている語は、知識人階層、な

いしは社会において普遍的に知られ、なおかつ、認められていたものと考えられる。これによって、これらの語がある程度当時の中国語に定着したことが裏付けられる。ここでは、『実学報』に出現する日本漢字語を『新名詞訓纂』と照らし合わせ、一つの側面から、『実学報』の日本漢字語の当時の中国語における定着状況を示す。その結果、両資料に重なって出現する日本漢字語は64語あることが確認できた。これは『実学報』における日本漢字語全体の8%を占めている。具体的な例を挙げると、「演説」「改良」「革命」「教育」「経済」「研究」「顧問」「思想」「自由」「政府」「専制」「地軸」「独立」「発明」などがある。

(2) 『辞源』

『新名詞訓纂』より少し時間が経ってから出版されたものに、『辞源』（丁種普及本、1937、長沙 商務印書館）があり、上・下・続の三巻からなる。1930年代の後半になると、中国は新文化運動の影響の下で、近代文明が次第に社会全体に浸透し、新しい語彙や文法も中国語に変化をもたらし、現代中国語の形成を推し進めた。この頃の中国語は、20世紀初頭の翻訳ブームによって取り入れられた新しい語彙や文法を消化・吸収する段階にある。新しい言語要素が中国語に定着しつつある時期に出版された『辞源』は、当時の言語使用状況を比較的忠実に反映し、8年の歳月をかけて、大量の新概念語と中国語に入った日本語を採録している。『実学報』で得た日本漢字語を『辞源』で調べたところ、193語の掲載が確認できた。これは『実学報』における日本漢字語全体の24%を占めている。具体的な例を挙げると、「移民」「演説」「科学」「学校」「議会」「機関車」「行政」「軍港」「国庫」「裁判」「自転車」「資本家」「社会」「自由」「大統領」「中学校」「統計」「内閣」「博覧会」などがある。

(3) 『漢語大詞典』

現代中国語での使用状況を調査するために、『実学報』の日本漢字語の『漢語大詞典』における掲載の有無及び意味・用法について調べた。「仮設」「試験」「新聞」などは、現代中国語では同形異義語になっているが、その掲載が確認できた。一部を除いて、ほとんどの語が『漢語大詞典』に採録されていることが分かった。例を挙げると、以下のようなものがある。

大蔵大臣 外務省 局長 極東 航路 採否 支店 集積 少佐 税関 製鉄所
船体 増税 造船所 総理大臣 滞在 中学校 通信 統合 発砲 など

『漢語大詞典』に収録されていない原因として、中国語の習慣に合わない、あるいは同じ意味を表す中国語がすでに存在し、当時の社会に浸透していた、などのことが考えられる。例えば、「少佐」「税関」「製鉄所」などである。「少佐」に当たる語として「少校」があり、「税関」に当たる語として「海关」がある。「…所」より「…廠」のほうが一般的であった。また、『漢語大詞典』には収録されていないが、実際に中国語として使用されている語もある。例えば、「局長」「極東」「航路」などである。「大蔵大臣」「外務省」「総理大臣」なども日本特有の行政機関と閣僚の表現として使われている。

(4) 『呐喊』『彷徨』『故事新編』『墳』

『実学報』を通して中国語に導入された日本漢字語は、その後の文学作品で使用され、中国語における定着が示されているのだろうか。ここでは、中国近代文学の父、思想家でもある魯迅の主要文学作品『呐喊』『彷徨』『故事新編』『墳』を対象に調査を行った。それらの作品は、1918年4月から1935年12月の間に書かれた短編小説と雑文を取っており、中国文化史上に極めて高い地位を占めている。また、上野（1983）によると、上記の作品は、文学作品としてのほかに、「五四」文学言語（口語主体）による高い完成度を示すものであるため、言語研究の資料として取り上げることもできると指摘されている。調査の結果、231語が魯迅の作品に出現していることが明らかになった。これは『実学報』における日本漢字語全体の28%を占めている。例を挙げると、「維新」「科学」「拡張」「学問」「教育」「軍事」「経済」「公園」「国民」「資本」「社会」「主義」「進歩」「卒業」「伝染」「図書館」「発明」「版図」「美術家」「病毒」「文明」などがある。

(5) まとめ

本節では、中国語に取り入れられた『実学報』の日本漢字語の行方について調査を行った。20世紀前半まで、多くの語が辞書と文学作品に出現していた。それらの語の定着が確認でき、使用状況の一端を窺うことができたと言えよう。また、定着した語を『分類語彙表』に基づいて分類した場合、いずれの資料においても、「人間活動—精神および行為」に属する語が最も多く、「教育」「経済」「思想」「自由」などの語が出現していることが確認された。そのほかに、「抽象的關係」と「人間活動の主体」に属する語も比較的多かった。日本漢字語の定着状況を詳細に把握するには、より多くの当時の文学作品と辞書を調査する必要があり、課題として残っている。

また、『辞源』、魯迅の作品などで出現している日本漢字語はどのような層に定着したのだろうか。当時の中国の教育状況と『実学報』の購読者の階層から考えると、経済的に教育を受けることができる半数以下、あるいは更に少ない、読み書きのできる人々の間で普及、定着したのではないかと推定される。また、近代文明が勢いよく導入される社会背景の下で、同時期に発行された刊行物の内容から見ると、近代化に目を向けた中国での定着が比較的速く、広く進んでいったと見受けられる。この点においては、明治期の新訳語の日本語における定着状況と類似点が認められる。

おわりに

『実学報』は、中国が民族危機に直面した時期に発行された定期刊行物で、日本漢字語が中国語に取り入れられた初期の資料である。本稿は、『実学報』を取り上げ、日本漢字語が中国語に借用された際の具体的な状況について調査を行った。その結果、次のことが明らかになった。

- (1) 日本語翻訳記事欄「東報輯訳」「東報訳補」を通して、政治、経済、教育、軍事な

ど様々な分野から日本漢字語813語が中国語に移入された。『実学報』に出現した日本漢字語は、一般語より専門語のほうが高い割合を占めている。『分類語彙表』に基づいて分析した結果、「人間活動—精神および行為」の項目に属する語が圧倒的に多いことが分かった。また、翻訳記事において、同一概念を表す新漢字語が併用されている現象が見られた。更に、これらの日本漢字語が日中同形語であるため、日中同形語という観点から考察する必要性が認められた。

- (2) 近代新漢字語が中国語へ移入した要因として、「日中同文」、語構成と造語法に共通点があるなどの言語的特徴や、民族危機からの脱出、国の強化、日本ブームなどの社会的背景が考えられる。
- (3) 当時の辞書、『漢語大詞典』、魯迅の作品を調査した結果、『実学報』の日本漢字語の中国語における定着状況がある程度明らかになった。

近代文明を表す日本漢字語は、『実学報』を通して近代中国語に強い影響を与え、人文科学分野の語彙の発展を促進した。その中には、「政府」「図書館」など、現代中国語の基礎語彙となっているものも多い。『実学報』における日本漢字語の使用は、それらの語が後に中国語に定着するために一定の役割を果たしたと推測される。この点から、『実学報』は情報伝達の資料としてだけでなく、語彙研究の資料としても価値のあるものと言える。本稿での考察に基づき、日本漢字語は辞書、翻訳書、専門書だけでなく、定期刊行物を含め、様々な形式で近代中国語に影響を与えていたと結論付けられる。

注

- 1 沈ほか（1998）3頁
- 2 最も古い勢力を守る者の情報収集に強い影響を与え、且つ、維新を主張する者の心を奪う力がある一筆者訳；湯（1993）439頁
- 3 学問を追究し、名実を考究することを主義とし、幅広く通論を採録し、各種の新聞を訳す一筆者訳；湯（1993）439頁
- 4 『万国公報』（1895.8～12 北京）、『中外紀聞』（1895.12～1896.1 北京）、『知新報』（1897.2～1901.1 澳門）、『国聞報』（1897.10～1900 天津）、『集成報』（1897.5～1898.5 上海）などである。
- 5 第2～11冊。巻2まで。第3冊が4ページで、第6冊が6ページであるのを除いて、5ページずつという紙幅になっている。
- 6 第9～14冊。巻1のみ。第9～11冊は3ページずつで、第12冊は8ページ、第13、14冊は4ページという紙幅になっている。
- 7 これを以って購読者諸君のご要望に応える一筆者訳；『実学報』580頁
- 8 その中で、「下議院議長更迭」という記事は出典不明である。
- 9 例えば、「大統領」「有志者」「不可思議」「精益求精」などである。

- 10 なお、『日本国語大辞典』で見出し語として掲載されている語は対象内に入れる。例えば、「人類学」「造船所」「植物園」などである。
- 11 広田（1969）、実藤（1981）、森岡（1991）、沈（1994）、陳（1997）、馬西尼（1997）、沈ほか（1998）、陳（2001）、佐藤（2007）など。
- 12 <http://dbo.sinica.edu.tw/~tdbproj/handy1/index.html>
- 13 詳細は、5の(1)を参照。
- 14 『大漢和辞典』において、見出し語としては掲載されているものの、用例が挙げられていない語がある（「現今」「現在」「現時」「最近」「昨今」「純然」「人種」「水泳」「政略」「全身」「専用」「草案」「炭田」「農村」「富裕」「脈搏」「用品」「緑茶」「冷静」「煉瓦」）。この20語について、中央研究院漢籍電子文献の「漢籍全文資料庫」で検索した結果、「現今」「現時」「人種」「政略」「全身」「草案」「用品」の7語は用例があったが、ほかの13語は、翻訳記事と同じ意味で用いられた例が見出せなかった。漢籍に用例があった7語は、「用品」を除いて、その用例が「新校本清史稿」、あるいはそれより新しい資料に見られる。したがって、これらの語は日本漢字語である可能性が高いのではないかと思われる。なお、本稿では、その出自の判定について、保留することとする。
- 15 中国、清代の古文家一派。明の帰有光のあとを承け、方苞（ほうほう）・劉大樞（りゅうだいかい）らが唱え、姚鼐（ようだい）に至って大成した学派。宋の性理学（義理）、漢の訓詁学（考拠）、唐宋の古文（詞章）があいまって学問が開けるとするもの。この派の学者がみな安徽省桐城の人であったところからいう（『日本国語大辞典』参照）。
- 16 北京师范学院中文系漢語教研組（1959）にも類似の指摘が見られる。77頁参照。
- 17 語の定着・消滅には時間を要することを考え、語が中国語に流入してからの30～40年を「当時」と記すことにする。
- 18 「新名詞」の出典について、佐藤（2007）で挙げられているものと一致するものも多い。

参考文献（刊行年代順）

- 北京師範学院中文系漢語教研組編著 中国語文雑誌社編（1959）『中国語文叢書 五四以來漢語書面語言的変遷と発展』商務印書館
- 広田栄太郎（1969）『近代訳語考』東京堂出版
- 実藤恵秀（1981）『増補 中国人日本留学史』くろしお出版
- 魯迅（1981）『魯迅全集』人民文学出版社
- 上野恵司（1983）『魯迅小説語彙の研究』『東洋研究』65 大東文化大学東洋研究所 pp.35-59
- 中華書局編輯部（1991）『実学報』（中国近代期刊彙刊）中華書局
- 森岡健二編著（1991）『改訂 近代語の成立 語彙編』明治書院
- 湯志鈞（1993）『戊戌時期的学会和報刊』台湾商務印書館
- 沈国威（1994）『近代日中語彙交流史 — 新漢語の生成と受容 —』笠間書院
- 馬西尼（1997）『現代漢語詞彙の形成 — 十九世紀漢語外来詞研究 —』漢語大詞典出版社

- 陳力衛 (1997) 「近代の辞書で調べる—漢語を中心に—」『日本語学』11 明治書院 pp.13-21
- 沈国威・内田慶市・熊月之・王揚宗 (1998) 『欧化国家を目指せ：情報発信基地としての19世紀日本—日本新聞の中国語訳を通して見る近代日中語彙交流』(財団法人松下国際財団研究助成・研究成果報告書)
- 林暁光 (1998) 「文化伝播の視点から見た現代中国語における日本語の受容」『金沢学院大学文学部紀要』3 (金沢学院大学) pp.53-69
- 陳力衛 (2001) 『和製漢語の形成とその展開』汲古書院
- 朱京偉 (2003) 『近代日中新語の創出と交流—人文科学と自然科学の専門語を中心に—』白帝社
- 高野繁男 (2004) 『近代漢語の研究—日本語の造語法・訳語法—』明治書院
- 李運博 (2005) 『『飲水室合集』にある日本借用語の性格』『日本語・敦煌学・漢文訓読の新展開』汲古書院 pp.357-372
- 佐藤亨 (2007) 『幕末・明治初期漢語辞典』明治書院
- 朱京偉 (2007) 『『清議報』に見られる日本語の借用語』『関西大学アジア文化交流研究センター第7回研究集会漢字文化圏近代語研究会第6回国際シンポジウム：漢字文化圏諸言語の近代語彙の形成創出と共有』発表要旨
- 沈国威 (2007) 「清末民初中国社会对“新名词”之反应」『アジア文化交流研究』第2号 関西大学アジア文化交流研究センター pp.105-124
- 秦春芳 (2007) 『『実学報』日本語翻訳記事の新漢字語—『日本国語大辞典』における初出用例との比較—』『広島大学大学院教育学研究科紀要』第2部第56号 (広島大学大学院教育学研究科) pp.241-250
- 沈国威 (2008) 『近代日中語彙交流史—新漢語の生成と受容—』(改訂新版) 笠間書院
- 黄河清 (2008) 「馬礼遜辞典中的新詞語」『或問』第15号 白帝社 pp.13-20
- 秦春芳 (2008) 「中国近代新聞と日本新漢字語の導入—日本語記事「清国膠州湾」の中訳を例として—」『或問』第15号 白帝社 pp.109-124
- 朱京偉 (2009) 「日本借用語研究の資料について」『漢字文化圏近代語研究会2009天津外国語学院国際シンポジウム：漢字文化圏近代言語文化交流研究』予稿集 pp.43-56

付記

本稿は、2008年度日本語学会中国四国支部大会 (2008年10月25日 於鳥取大学) における口頭発表の一部をもとに加筆修正を施したものである。席上および発表後に貴重なご意見とご教示を賜った諸先生方に心よりお礼申し上げます。

— しん・しゅんほう、広島大学大学院教育学研究科博士課程後期在学 —